

拾遺抄の屏風歌(承前) —貫之歌以外の詞書の絵の説明—

田島 智子

(平成20年3月31日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

要旨 貫之屏風歌を検討した前稿「拾遺抄の屏風歌—詞書の絵の説明について—」に続いて、本稿では貫之歌以外の屏風歌が、どのような場合に絵の説明が付けられるのか、あるいは付けられないのかを検討している。貫之歌以外は、現行の私家集が採歌資料となったとはかぎらないので、その点に注意しながら考察している。

考察の結果、おおそ貫之屏風歌と同様の傾向が見られた。すなわち、屏風歌によってもたらされた題材、古今集にない新しい題材には絵の説明を付け、古今集にもあるよく知られた題材には付けていないのである。ただし、この方針が徹底して実行されていない点も、貫之屏風歌と同様であり、同じ題材であるのに、絵の説明を付けたたり付けなかつたりする一貫性の無さもうかがえた。

さらに、以上の結果からは、屏風歌は絵と合わせて楽しむべきという拾遺抄撰者の考えや、精度があまり高くない拾遺抄編纂の状況が見えてくる。

キーワード：拾遺抄・屏風歌・詞書・絵・貫之歌以外

はじめに

前稿「拾遺抄の屏風歌—詞書の絵の説明について—」^(注1)において、

貫之の屏風歌に限定した上で、拾遺抄がどのような場合に絵の説明を付け、どのような場合に付けないのかを検討した。貫之屏風歌に限定したのは、現行の貫之集が拾遺抄の採歌資料となったことが判明していて、両者の比較が有効だったためである。

貫之歌以外については、拾遺抄の採歌資料となったものが明らかになっていないので、現行の私家集と単純に比較して、結論付けるわけにはいかない。たとえば、現行の私家集に絵の説明があり、拾遺抄で絵の説明がない場合、貫之歌であれば、拾遺抄が省略したとみなすことができた。しかし、貫之歌以外については、拾遺抄が省略したとはかぎらない。元の資料にすでになかったために拾遺抄でも付けなかつたという可能性があるからである。

そのような事情も考慮しつつ、本稿では、貫之歌以外について、屏風歌の絵の説明がどのような方針で付けられているのか、または付けられていないかを考察していく。

一、貫之屏風歌の確認

まず、貫之屏風歌の状況を振り返っておく。前稿を簡略にまとめなおすと、(表1)～(表5)、及び次の関係図になる。

〔表1〕拾遺抄に絵の説明がある場合―新しい題材で必要性が認められる―

貫之集Ⅰの絵の説明		拾遺抄の絵の説明	
山里に時鳥なきたり (貫之集Ⅰ431) <small>(註2)</small>	山里に郭公のかたある所に (拾遺抄68)		
おとこをんなの木の本にむれ居たる所に舟にのりてわたる人あるかをよひをさして物いへるやうなり、そのさま郭公をさけるに、たり (同452)	渡りしたる所に郭公なきたるかた有る所に (同74)		
八月こまむかへ (同14)	こまむかへのかた有る所に (同114)		
〔絵の説明なし 小鷹狩の歌〕 (同275)	こたかがりしたる所に (同119)		
十二月仏名 (同22)	仏名したるかた有る所に (同160)		
をんなともやまてらにまうてしたる (同45)	寺まうでしたる女の有る所 (同379)		
りんしのまつり (同363)	臨時祭のかたあるところに (同426)		
竹に雪のふりかゝれる (同324)	竹に雪のふりかかりたるかたあるところに (同440)		

〔表2〕拾遺抄に絵の説明がある場合―古今集にもよくあり必要性が認められない―

貫之集Ⅰの絵の説明		拾遺抄の絵の説明	
むめの花さけるところ (貫之集Ⅰ113)	水辺梅花の開けたるかた有る所 (拾遺抄18)		
ふるさとの花を見る (同425)	あれたるやどに人のまできて花見侍るかた侍るところに (同29)		

〔表3〕拾遺抄に絵の説明がない場合―新しい題材で必要性が認められる―

貫之集Ⅰの絵の説明		拾遺抄の絵の説明	
四月おほらわのまつりのつかひ (貫之集Ⅰ145)	なし (拾遺抄471)		

〔表4〕拾遺抄に絵の説明がない場合―新しい題材だが歌から理解可能で必要性が認められない―

貫之集Iの絵の説明		拾遺抄の絵の説明
五月ともし（貫之集I 9）	なし（拾遺抄76）	
かはのほとりの松（同118）	なし（同433）	
人の家の池のほとりの松のしたにゐて風のをときける（同120）	なし（同518）	

〔表5〕拾遺抄に絵の説明がない場合―古今集にもよくあり必要性が認められない―

貫之集Iの絵の説明	拾遺抄の絵の説明
梅花わかかなある所女すのまへにいて、見る（若菜摘の歌）（貫之集I 354）	なし（拾遺抄7）
〔絵の説明なし〕梅の木に雪が降りかかる歌（同67）	なし（同10）
三月花ちる（同128）	なし（同52）
三月つこもり（同8）	なし（同53）
七月（同100）	なし（同88）
七月七日（同12）	なし（同94）
七月七日（同395）	なし（同95）
むま車にのりて人おほく野にいたり、さまざまの花さきましりたり（同299）	なし（同112）
九月きり山をこめたり（同156）	なし（同127）
山のもみちしくれたる所（同27）	なし（同136）
家にをんな月をみる（同378）	なし（同498）
〔絵の説明なし〕紅葉する山の端から月が出る歌（同40）	なし（同503）

拾遺抄に
絵の説明が
ある場合
必要性が認められる
新しい題材のため
― 八例

必要性が認められない
古今集にもよくある題材のため
― 二例

必要性が認められる
新しい題材のため
― 一例

拾遺抄に
絵の説明がない場合
必要性が認められるが
歌から理解可能
― 三例

必要性が認められない
古今集にもよくある題材のため
― 十三例

以上から、拾遺抄の方針として、次のことがうかがえた。

- ・ 貫之集の中でも、なるべく絵の説明がある歌を採歌する。例外は〈表1〉の一例(拾遺抄一一九)と〈表5〉の二例(拾遺抄一〇・五〇三)の、計三例。
- ・ 貫之集に絵の説明がない場合は、新たに付け足さない。例外は〈表1〉「こたかがりしたる所に」(拾遺抄一一九)の一例。
- ・ 絵の説明を残すのは、古今集にはない、屏風歌によってもたらされた新しい題材の場合。例外は〈表2〉の二例。
- ・ 絵の説明を残さないのは、古今集にあるよく知られた題材か、珍しい題材でも歌から題材が理解できる場合。例外は〈表3〉の一例。

ただし、以上の方針は精密に実行しておらず、少数ながら例外が存在する。

つまり、貫之屏風歌からうかがえる拾遺抄の姿勢は、歌をなるべく正確に理解した上で採歌し、必要に応じて読者にも正確に理解するための情報を提供しようとした、ということであった。

二、拾遺抄に絵の説明がある場合その1―新しい題材―

では、貫之以外の屏風歌についても、同じ傾向が認められるのかを、検討していこう。末尾の〈表6〉(表7)は、拾遺抄で絵の説明がある場合とない場合を一覧にしたものである。現行の私家集にも見出せる場合は、参考のために掲載している。拾遺抄がそれらの私家集を直接的な採歌資料としたという意味ではない。本文中でも、参考のために私家集を掲載し、←で拾遺抄と結んでいるが、やはり、採歌資料とはかぎらないことを示すために、私家集は()に入れている。

まず、〈表6〉拾遺抄に絵の説明がある場合の、全十九例を検討してゆく。貫之屏風歌では、古今集にはない、屏風歌によってもたらされた新しい題材であるため、絵の説明が残されているケースが多かった。貫之歌以外についても、次に列挙するように、同様の例が多い。

まず「川渡り」と「仏名」が、そのようなケースとして挙げられよう。貫之屏風歌にもあった(表1)波線部)。詳しい考察は前稿で述べたので省略するが、屏風歌がもたらした新しい題材であるため、絵の説明を付けたと考えられる。

c

〔御屏風〕

なつよとのわたりにふねあり郭公なく

〔歌略〕（歌仙歌集本忠見集 七）

←

天曆御時の屏風によどの渡をすぐる人有る所に郭公を
かける
忠見

いづかたになきてゆくらん郭公よどのわたりのまだよぶか
きに（拾遺抄 夏 七三）

k

〔屏風のうたよみはへるに〕

おなしいへの仏名のあしたに、導師のかへりはつるむ
めのきのもとにすゑて、ものなとかつけはへるところ

〔歌略〕（能宣集Ⅲ 二一九）

←

屏風のゑに仏名の朝にむめのきのもとにて導師とある
じとわかれをしみたるかた有るところに
大中臣能宣

雪ふかき山ぢへなにかかへるらんはるまつ花のかげにとま
らで（拾遺抄 冬 一六一）

〔倉橋山と郭公〕の組み合わせも新しい。

d

東宮にさふらひけるおほんあふきに、くらはしやまを
かけりけるに、ほとゝきすのとひわたりたるかたある
ところに、人々みな歌つかうまつりけるに

〔歌略〕（実方集Ⅱ 一八九）

←

東宮に侍ひける御ゑにくら橋山をかけりけるに郭公の
とびわたりたる所に人人歌つかまつるなかに

実方中将

さつきやみくらはし山の郭公おほつかなくもなき渡るかな
（拾遺抄 夏 七九）

〔倉橋山〕は古今集にはない。しかも、「郭公」との取り合わせは
他に例がない。「倉橋山」は、

橋立 倉橋山 立白雲 見欲 我為苗 立白雲（万葉集 卷七）

一一二八六）

〔延喜三年十月十九日おほせによりてうたみつたてまつる、
女一のみこの裳きたまふときに、うちよりさうそくたまふ
そのもにみつつきかたきにすれるうた〕

しらくものたちのみわたるくらはししやまにころをおもひつ
めつ、（躬恒集Ⅳ 三）

のように、暗さと対比させて白雲を詠んだり、

倉橋之 山乎高歟 夜窄尔 出来月之 片待難（万葉集 卷九）

一七六七 沙弥女王）（古今和歌六帖 雑月 三四二）

のように、高さゆえに月の出が遅いことを詠んだりしていた。この
歌が詠み合わせた扇の絵が「倉橋山に郭公が飛びわたる」というも
のだったのは、「倉橋山」の名から皐月闇の「暗さ」を連想し、皐
月闇につきまものの郭公と取り合わせたからであろう。そのような新
しい組み合わせであるため、絵の説明をつけたものと思われる。

次の「納涼」も古今集にはない。「納涼」には、「木陰での納涼」と「泉
のほとりでの納涼」の二通りのパターンがある。前者は屏風歌がほと
んどであり、屏風歌によつてもたらされた題材と言える。次の歌
は、その屏風歌特有の「木陰での納涼」であるため、絵の説明を残

していると思われる。

e

〔延喜十二年に二宮イ
女四宮の御屏風うた
〕
〔歌略〕（躬恒集Ⅰ 九五）
←
月令の御屏風にたび人きのかげにやすみたる所
読人不知
行すゑはまだとほけれど夏山のこのした影は立ちうかりけ
り（拾遺抄 夏 八二）

なお、拾遺抄では作者名が「躬恒」ではなく「読人不知」である。^(注3) また、現行の躬恒集では、歌はあっても絵の説明がない。拾遺抄が採歌資料としたのは、躬恒集ではなかった可能性が高い。

g

〔天元二年十月、依宣旨たてまつらする御屏風のうた〕
〔八月十五日の夜、人の家の池にはちすおひたり、この
はうかふ、月かけおちたり、おとこ女所くにあそぶ、
すたれをへたて、ものかたりするもあり〕
〔歌略〕（順集Ⅰ 一四三）
←
屏風に八月十五夜にいけ有るいへにてあそびたるかた
有る所に
源順
水のおもにてる月なみをかぞふればこよひぞ秋の中なり
ける（拾遺抄 秋 一一五）

「八月十五夜」も意外に古今集にはない。かつて述べたことがあ

るが、「八月十五夜」は屏風歌で盛んに詠まれ、定着した題材である。^(注4) だから絵の説明を付けたのだろう。

ところで、拾遺抄歌の絵の説明では「八月十五夜に、池がある家で遊んでいる絵がある」とあるだけだが、現行の順集の絵の説明はもつと詳細である。すなわち、「人の家の池に、蓮が生えて木葉が浮かんでいる。月光が射している。男女がところどころに遊び、簾を隔てて話をしている男女もいる」というものである。拾遺抄は順集に比べると圧倒的に情報量が少ない。しかし、順集が説明するような、蓮・木葉・月光・簾を隔てた男女と言う要素は、歌に詠まれている。歌に詠まれた「水」（二重傍線部）が池の水であり、「遊び」をしている人の立場での歌だとわかればよい。拾遺抄の絵の説明は、必要十分な情報量になっている。

i

〔うちの御歌合に〕
あしろ
〔歌略〕（能宣集Ⅰ 三二二）
←
寛和二年清涼殿の御障子のゑにあじろをかける所に
読人不知
あじろぎにかけつつあらふからにしきひをへてよするもみ
ぢなりけり（拾遺抄 冬 一三九）

「網代」も古今集にはない。用例は割愛するが、屏風歌にさかんに詠まれることによって、和歌世界に定着した題材である。

なお、能宣集では歌合歌とある。歌合を調べると、寛和二年（九八六年）内裏歌合にこの歌が存在する。歌合の後、障子歌に転用したのか。ともあれ、この歌の採歌資料が、現行の能宣集とはかなり違

うものだったことは推定できる。

m

屏風にみくまのかたをかける所
兼盛
さしながら人の心をみくまのうらのはまゆふいくへなる
らん（拾遺抄 恋下 三五〇）

歌枕「御熊野」を詠んだ歌は古今集にない。そのために絵の説明が残されていると考えられるのだが、もう一つ理由がありそうである。それは、屏風歌なのに、恋歌の体裁を取っていることである。この歌では、御熊野の浜木綿の花びらの重なりを、恋する人の心にとえていいる。このような詠み方は、

熊野之 浦乃浜木綿 百重成 心者雖念 直不相鴨（万葉集）

卷四 四九九 柿下人麻呂（古今和歌六帖 一九三四）

という万葉歌以来一般的であり、古今和歌六帖などにも多数見出せる。珍しいものではない。また、恋歌仕立ての屏風歌もたまにある。しかし、恋歌仕立ての屏風歌は少数例であり、通常は画中の人物の立場で風景に合わせて詠むものである。「御熊野」を詠んだ他の屏風歌を見ると、

みくまの、をふねよせてはまゆふとる

みくまの、うらのはまゆふたかふねのなにかはいくへつみてか
へらむ（忠見集 I 五）88天曆八年（九五四年）村上天皇名所屏風

御熊野

うき事も山道しらすたつねこし我みくまのに入やしなまし（信明集 I 四）同屏風

と、小船を浦に寄せて浜木綿を摘もうとする人の立場で詠んだ歌（忠見歌）や、憂世を逃れて熊野に分け入る人の立場で詠んだ歌（信明歌）

であり、風景を髣髴とさせる。問題の拾遺抄歌は、伝統的な恋歌そのものの詠み方であり、拾遺抄も恋の部に分類している。恋の部に分類したが、実は御熊野の風景を詠んだ歌であることを明示しようと、絵の説明を付けたのであろう。

次の「川辺の松」は、貫之屏風歌に例があった（表4参照）。ただし貫之屏風歌では、新しい題材なのに絵の説明が省略されていた。それは歌から絵の内容が理解できるためだろうと、前稿では推定した。

n

「五条の内侍のかみ御四十賀を、きよつらのみふ卿のつかまつりたまふ屏風のゑに」
まつのすゑうみにいりたる所
〈歌略〉（伊勢集 I 七一）
←
五条の尚侍の賀の屏風のゑに、松のうみにひちたるかたあるところに
伊勢
うみにのみひたれる松のふかみどりいくしほとかはしるべからむ（拾遺抄 雑下 五一六）

この伊勢歌ではどうかというと、貫之歌と同様、上の句が絵の説明と重なっている。だから、省略しても差し支えなさそうである。しかし、伊勢歌では絵の説明が残されている。同じ題材、同じような詠み方であるのに、貫之屏風歌と伊勢屏風歌で、一貫性の無い扱いがされている。このようなところに、拾遺抄の、方針を徹底して実行しようとする態度の乏しさが、露呈していると言えよう。

次は、「法師と舟」の歌である。

p

法師舟にのりたる所
 〈歌略〉(道綱母集 三九)
 ←
 屏風のゑに、法師のふねにのりて侍りける所に
 中納言道綱母
 わたつみはあまのふねこそ有りときけのりたがへてもござ
 てけるかな(拾遺抄 雑下 五二四)

新古典文学大系『拾遺和歌集』で、「舟に海人(尼)ならぬ法師
 がいるのは不審だという洒落。」と注(注7)されている。このような洒落
 が成り立つのは、「尼」について、

なみながらそでぞぬれぬる海人小舟のりおくれたるわが身とお
 もへば(古今和歌六帖 仏事 あま 一四五〇)
 のような、「尼」に「海人」、「法」に「(舟に)乗る」を掛ける歌が
 よく詠まれていたからである。このような歌は、古今集にはない。
 そもそも「法師」を客観的な題材にした歌が古今集にない。

s

忠連が房の障子のゑに法師のしにてはべるかばねを法
 師のみはべりてなきたるかたをかきて侍るところを、や
 まにのほりて侍りけるついでにみはべりて
 ちぎりあればかばねなれどもあひぬるをわれをばたれかと
 はんとすらん(拾遺抄 雑下 五七〇)
 相方朝臣

これも「法師」の歌である。「法師」が屏風の絵に描かれることは、
 たまにあつた。たとえば、次のごとくである。

をむな簀子にさしいりたる桜の花折たる 馬にのりて道行
 法師垣越にうちよりてみる
 物ごしに花をうちみて人しれずにびたる心うつろひぬべし(貫
 之集西本願寺本 二〇八)^(注8) 66承平五年(九三五年) 十二月内裏
 屏風

法師、ふかきやまにゐたるところ
 あとたえていりにし日よりよしの山たきのをとにも人のきこえ
 ぬ(中務集Ⅱ 九九) 146永祚二年(九九〇年) 頃以前絵
 一首目は、馬に乗った法師が、女が簀子で桜を折るさまを垣根越
 しに覗く絵で、破戒僧めいた振る舞いが描かれている。二首目は、
 深山に籠もる法師の、孤独な姿が描かれている。このように僧の描
 かれ方は様々であり、定型化されていない。問題の拾遺抄歌のよ
 うに、法師の遺体をもう一人の法師が見て嘆いている絵は他に例がな
 く、絵の説明はどうしても必要なものであつた。

r

屏風絵に、ぬすひとた、かひたるかた書たるかた、の
 人ともみえぬに
 〈歌略〉(為頼集 六五)
 ←
 三条おほいまうちぎみの家にかかせはべりけるたび
 とのぬす人にあへるかた侍りけるところに
 藤原為頼
 ぬす人のたつたのやまにいりにけりおなじかざしのなをや
 のこさん(拾遺抄 雑下 五三九)

「盗人」を題材にした歌は古今集にはない。そもそも「盗人」を
 詠むことは珍しく、盗人に入られた経験を詠んだ、

ぬす人のいりて侍りし又の日、人のかいねりをおこせて侍りし返しつかはししに

あさからず思ひそめてし衣がはかかるせにこそ袖もひちけれ
（元輔集 一一二〇）

というような歌などがあるが、かなり珍しい。

以上十一例が、古今集にはない、屏風歌によってもたらされた新しい題材であるため、絵の説明が残されているケースである。

三、拾遺抄に絵の説明がある場合その2―説明が必要な詠み方―

以下の三例は、古今集によくある題材なのに絵の説明がある。

j

東三条院の御賀屏風のゑに、こしのしらやまのかたかきたる、人の、ほるさきにまた人のとをくゆく
 〔歌略〕（輔尹集 五九）

←

屏風のゑにこしの白山のかたをかきて侍りける所に
 藤原佐忠朝臣

我ひとりこしのこしぢをこしかども雪ふりにけるあとをこそ見れ（拾遺抄 冬 一四九）（拾遺集 二四八 第二句）（しの山ぢに）

「越の白山」を詠んだ歌は、古今集に、

こしのくにへまかりける時しら山を見てよめる みつね
 きえはつる時しなればこしぢなる白山の名は雪にぞありける

（古今集 羈旅 四一四）

という歌の他、多数ある。しかし、問題の拾遺抄歌では歌中に「白山」

とは詠まれていない。白山に付き物の「雪」が詠まれているので、「白山」であることはわかるが、少々心もとない。

こしのかたへゆくひとに

わすれずはいまはこしぢとおもへどもいまはかへるのやまをた
 のまむ（忠見集 一二七）

という歌のように、越の国全体を詠んだ歌と誤解されるおそれもある。わかりにくい詠み方をしているため、明確に「白山」の歌であることを示そうとしたのだろう。

1

一条摂政の中將に侍りける時、ちちの右大臣の賀し侍りける屏風のゑに、松原にもみぢのちりまできたるか
 た侍りける所に
 小野好古朝臣

吹く風によそのもみぢはちりぬれどときはのかげはのどけかりけり（拾遺抄 賀 一七九）

「紅葉」と常緑の「ときは」を対比する歌は、古今集に、

秋の歌合しける時によめる

紀よしもち

紅葉せぬときはの山は吹く風のおとにや秋をききわたるらむ
 （古今集 秋下 二五二）

秋

秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける
 （古今集 賀 三六二）

とある。ただ、これらの歌では、「ときはの山」が詠まれている。

他にも「紅葉」と対比する歌は、ときはの「山」であることが多い。好古歌は、絵の説明によれば松原である。おそらく海辺の光景であろう。絵の説明がなければ、古今集歌のような「ときは山」を思い浮かべてしまうだろう。それを避けて正確にこの歌を味わうために

は、「ときは」が松原であるという説明が必要なのである。

0

天曆御時に名ある所所のかたを屏風にかかせ給ひて人
 人にうたてまつらせ給ひけるに、たかさぎ
 をのへなる松のこずゑはうちなびきなみの声にぞ風もふき
 ける（拾遺抄 雑下 五一七）

〔伊勢〕

「高砂」の歌は、古今集に多数ある。

題しらず よみ人しらず
 かくしつ世をやつくさむ高砂のをのへにたてる松ならなくに
 （古今和歌集 雑上 九〇八）

のように、「高砂」の「尾上の松」を詠むこともよくあつた。しかし、
 問題の拾遺抄歌は歌中に「高砂」という地名を詠み込んでいない。「を
 のへなる松」だけでは「高砂」を詠んだ歌とは限定できない。たと
 えば、

あき
 ちとせふるをのへのまつはあき風にこゑこそまされいろはかは
 らず（躬恒集 二五八）（新古今和歌集 賀 七二六 詞書「題
 不知」）

という歌は、特定の歌枕を詠んだものではない。拾遺抄は詞書に「た
 かさぎ」と示すことで、正確に歌の内容を示そうとしている。
 以上三例は、古今集にある題材ではあるが、詠み方の点で絵の説
 明が必要だと判断したのでらう。

四、拾遺抄に絵の説明がある場合その3—古今集によくある題材—

しかし、以下の五例は、絵の説明は必要なかったと思われる。

a

〔内の御屏風四てうかわか〕
 むめのはなのもとにまらうときたり
 〈歌略〉（M系統本兼盛集 一六一）^{（注10）}

←

冷泉院御時の御屏風に梅の花有るいへに人のきたると
 ころ 兼盛
 わがやどの梅のたちえや見えつらんおもひのほかに君がき
 ませる（拾遺抄 春 一一）

梅花が咲く家で人を待つ歌は、古今集にも、次のようにある。

〔題しらず〕 「よみ人しらず」
 やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけ
 り（古今集 春上 三四）
 また、人が訪れた場面であることは、「君がきませる」と、第五
 句に明確に詠まれており、絵の説明は必要ない。

b

〔齋院の御屏風の歌、春山にゆく人あり〕
 〈歌略〉（伊勢集Ⅱ 九七）

←

齋院の屏風に春山道をゆく人のかた有る所に 伊勢
 ちりちらずかまほしきをふる里の花見てかへる人もあら
 なん（拾遺抄 春 三〇）

「故郷の花」の歌は、古今集に次のようにある。

題しらず

よみ人しらず

こまなめていざ見にゆかむふるざとは雪とのみこそ花はちるら
め（古今集 春下 一一一）

拾遺抄歌が山道を行く途中の人の立場で詠まれていることも、「散っているかどうかを聞きたいから、古里の花を見てきた誰かに行き会わないものか。」という歌意から理解できる。

f

修理大夫義懐家の屏風にたなばたまつりのかたかけの
所に 惠京法師
いたづらにすぐるつきひをたなばたのぬるよのかずとおも
はましかば（拾遺抄 秋 九六）

「七夕」は、貫之屏風歌でも絵の説明が省略されていた（表5）波線部）。ただ、この歌では、「たなばたまつり」とある。そのことに意味があるのかを考えてみよう。たとえば、

七月、たなはたまつりして、たらひにみついで、かけを
女どものみ侍る所

あまのかはそらをやとせるみつか、みたなはたつめのあふせし
らせよ（惠慶集 七） 113 応和二年（九六二年）一月七日〜康保五
年（九六八年）六月十三日右兵衛督忠君屏風

という例では、「盥に水を入れて光を映す」という七夕祭りの具体的な行動が説明されており、それが歌にも反映されている。しかし、問題の拾遺抄歌では、「七夕祭」の具体的な行動が詠まれているわけではない。絵の説明が必要とは思えない。

h

「障子の糸に」
十月はかりに、たひゆく人の、もみちしたる木のもと
に、やとりたるを
← 「歌略」（惠慶集 一三四）
二条右大臣のあはたの山庄の障子の糸にたび人のもみ
ぢ有るところにやどりたるかた有るに 惠慶
いまよりはもみちのもとにやどとらじをしむにたびのひか
ずへぬべし（拾遺抄 秋 一三一）

「旅人と紅葉」の歌である。古今集に次のような歌がある。
をのといふ所にすみ侍りける時もみちを見てよめる

つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする（古
今集 秋下 二九九）

「幣としてたむけられたような紅葉を見て旅心をかきたてられた」という歌であり、旅と紅葉が密接な関わりがあることがわかる。また、旅人が紅葉の下に宿っている状況であることは、「今からは紅葉の下に宿を取るまい。」という上の句から理解できる。

q

天曆御時、屏風の糸にながらのはしはしらわづかに
のこりたるかたある所に 清正
あしまより見ゆるながらのはしはしらむかしのあとのしる
べなりけり（拾遺抄 雑下 五二六）

歌枕「長柄橋」は、古今集にも、

「題しらず」

「よみ人しらず」

世中にふりぬる物はつづくのながらのはしと我となりけり

(古今集 雑上 八九〇)

とあり、古いものとして詠まれている。長柄の橋が朽ちていることについて、とくに絵の説明が必要とも思えない。

以上、五例は絵の説明がなくてもよさそうなのに、付けている場合である。貫之歌ではこのような例は二例であった(表2)参照。貫之歌以外の方が数が多いことから、より方針が徹底されていないように思えるが、割合から見れば同程度である。貫之歌では、必要性が認められるもの八例に対して、認められないもの二例だった。貫之歌以外では、必要性が認められるもの十四例に対して、認められないもの五例である。拾遺抄は、貫之歌も貫之歌以外も、だいたい同じような調子で、絵の説明を付けていったと思われる。その結果、方針が徹底されない割合もほぼ同じになったのであろう。

ところで、ここまで検討してきた、絵の説明がある場合十九例を、私家集との関係という観点で見直してみよう。十九例中十三例は、現行の私家集にもあり、両者を見比べることができた。そのうちe「木陰での納涼」とi「網代」を除く十一例に、私家集にも絵の説明があったのだが、説明内容は拾遺抄とほぼ同じであった。g「八月十五夜」のように、順集では絵の説明が詳しいが拾遺抄ではごく簡単である、というような例もあったが、それでも絵の趣旨については食い違いがなかった。

むしろ、現行の私家集が拾遺抄の採歌資料だったとみなせるほどの近さはない。拾遺抄が採歌資料とした歌集は、収載歌数や構成、屏風歌制作事情についての詞書という点では、現行の私家集とは異なったものであっただろう。また、私家集によって拾遺抄との距離の程度がさまざまであることは言うまでもない。だが、個々の歌に付けられた絵の説明というレベルでは、ある程度の近さを認めても

よさそうである。

五、拾遺抄に絵の説明がない場合その1—新しい題材—

次に、〈表7〉拾遺抄に絵の説明がない場合を検討する。全部で三十八例あり、二つに分けられる。

三十八例	}	現行の私家集に絵の説明がなくて 拾遺抄にも絵の説明がないもの	— 十八例
		現行の私家集に絵の説明があるのに 拾遺抄には絵の説明がないもの	— 二十例

拾遺抄に絵の説明がない理由は、二つ考えられる。一つは、採歌資料にもととなかったため、もう一つは、採歌資料には絵の説明があったのに、拾遺抄が必要なしと判断して取り去ったためである。拾遺抄が現行の私家集を採歌資料としてしていると断言できるならば、前者の十八例は、採歌資料にもととなかったために拾遺抄でも付けなかったと見なすことができ、後者の二十例は、採歌資料にはあったが拾遺抄が必要なしと判断して取り去ったと見なすことができる。

しかし、何度も述べてきたように、現行の私家集は採歌資料とまでは言えない。だから、前者の十八例には、拾遺抄が判断して絵の説明を取り去った例がいくらか含まれるだろうし、後者の二十例にも、採歌資料にもとと絵の説明がなかったという例がいくらか含まれよう。

だが、そのような例はさほど多くあるまい。と言うのは、前述し

たように、絵の説明というレベルでは、拾遺抄と現行の私家集の間には、ある程度の近さが認められるからである。現行の私家集での絵の説明の有無は、拾遺抄が採歌資料にした歌集での絵の説明の有無に、ある程度対応していると考えられる。

さて、拾遺抄の方針を知るために考察すべきは、拾遺抄が必要なと判断して取り去ったのはどのような場合かということである。そこで、後者の二十例について検討を加えていこう。

まず、絵の説明を付けるべきだったのに、取り去った場合がある。

⑮

「内御屏風和歌」 八月十五夜 〔歌略〕（躬恒集Ⅰ 一〇四）	←	同じ「延喜」御時の御屏風に いづこにかこよひの月のみえざらむあかぬは人のこころなりけり（拾遺抄 秋 一一七）	躬恒
----------------------------------	---	---	----

⑰

「内の御屏風四帖わか」 八月十五夜 〔歌略〕（兼盛集Ⅰ 一六五）	←	屏風に よもすがら見てをあかさん秋のつきこよひはそらに雲なかりけり（拾遺抄 秋 一一八）	兼盛
-------------------------------------	---	---	----

「八月十五夜」としては、二四頁で検討したgの例があった。gは、古今集にはなくて屏風歌によって定着した題材であるため、絵の説明が残されていた。この二例の「八月十五夜」の歌が、絵の説明を付けられていないのはなぜなのか。

考えられる一つの理由として、⑮「今夜の月はどこからも見える」、⑰「今夜は雲がなく、光がすみずみまで行き渡る」という詠み方によって、「八月十五夜」の歌だと十分理解できると判断したのかも知れない。というのは、実は⑮の歌は古今和歌六帖で「十五夜」の歌として集められた六首中の一首であり、六首中五首までが、同様の詠み方なのである。

もう一つの理由として、拾遺抄の配列が関わるかもしれない。この前後は次のように配列されている。

- 一一五番 gの例（詞書に「八月十五夜」の説明あり）
- 一一六番 延喜御時に八月十五夜後涼殿のはざまにて藏人所の男ども月の宴し侍りける 藤原経臣
- ここにだに光さやけきあきの月雲のうへこそおもひやられる
- 一一七番 ⑮の例（詞書に「八月十五夜」の説明なし）
- 一一八番 ⑰の例（詞書に「八月十五夜」の説明なし）

gで「八月十五夜」であることを示し、一一六番藤原経臣歌でも示した上に、⑮⑰でも「八月十五夜」と示すことは煩わしいと考えた可能性もある。

このように、一応の理由付けはできるのだが、gでは絵の説明を付けていたことを考えると、一貫性がない。

32

「内御屏風和歌」 くさあはせ 〔歌略〕（躬恒集Ⅰ 九九）	←	延喜御時月令御屏風に さくら花我がやどにのみ有りとみばなきものぐさはおもはざらまし（拾遺抄 雑上 三九五）	躬恒
---------------------------------	---	--	----

「草合」は、かなり珍しい。他に重之集一六一番や輔尹集七番に例はあるが、勅撰集入集は、

人のくさあはせしけるにあさがほかがみぐさなどあはせけるにかがみぐさかちにければよめる よみ人しらず
まげがたのはづかしげなるあさがほかがみぐさにもみせてけるかな (後拾遺集 誹諧歌 二二四)

という後拾遺集が最初である。説明は付けるべきだっただろう。以上三例は、古今集にはない新しい題材であり、絵の説明を付けそうな、または付けるべきだったケースである。

六、拾遺抄に絵の説明がない場合その2―歌から理解可能―

次に、古今集にはない新しい題材ではあるが、歌の詠み方から題材がはっきり理解できるために、付けなかったと思われるケースがある。貫之歌でも三例あった(表4参照)。

田 島 智 子

⑨

「おなしとし(応和二年)の十一月、前朱雀院のわか宮の御もきのひのれうに、御ひやうふつかまつらせたまふ、人くにおほせてたてまつらせ給歌のうち」
四月、うの花さげるところ
〔歌略〕(順集I 四三二)

← 屏風に

我がやどのかきねや春をへだつらむ夏きにけりとみゆる卯の花 (拾遺抄 夏 五八)

順

「卯花」を詠んだ歌として古今集にあるのは、次の歌である。郭公のなきけるをききてよめる みつね

夏 一六四
古今集歌では、卯花そのものを詠んではないので、新しい題材と言える。片桐洋一氏が「拾遺抄」の歌材と表現―大和絵屏風歌との関連において―で指摘されたように、「卯花」は屏風歌によくある題材で、垣根に咲く白い花を詠むことが定番であった。新しい屏風歌によってもたらされた題材であるのに、絵の説明がないのは、歌中に「卯の花」とあって、題材がはっきり理解できるためと思われる。

⑬

「屏風のうたよみはへるに」
五月、さうふくきたるいへのはしに、人なかめてゐたるところ
〔歌略〕(能宣集III 二〇一)

← 屏風に

昨までよそにおもひしあやめ草けふ我がやどのつまと見ることかな (拾遺抄 夏 七〇)

大中能宣

「菖蒲」は意外にも古今集には、次の恋歌しかない。

題しらず 読人しらず
郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな (古今集 恋一 四六九)

拾遺抄歌では、「昨日まで無関係と思っていた菖蒲草を、五月五日

の今日は、我が宿の軒の端にかよひはしめて四日といふに、五月五日の行事を詠んでいる。当時、五月五日に菖蒲を茸く風習は根付いており、

権大納言ひわ殿にかよひはしめて四日といふに

わきもこかねやのつまなるあやめ草ねもあらはれてけさやみゆらん（朝忠集 三五）

という、拾遺抄歌に詠み方がよく似た歌もある。拾遺抄歌の内容から、軒に茸いた菖蒲を見ている人の立場で詠んだ歌であることがわかるので、絵の説明は必要ないと判断したのであろう。

⑮

「西宮の源大納言大饗日たつるれうに、四尺屏風あたらしくてうせさしむるれうの歌」

五月、ともしするところ

← 〈歌略〉（順集Ⅰ 一一）

西宮右大臣の家の屏風に

読人不知

郭公まつつけてやともしする人も山辺によをあかすらん（拾遺抄 夏 七八）

「照射（ともし）」は貫之屏風歌にもあった（表4）参照）。新しい題材なのだが、歌に「ともし」という言葉が詠み込まれており、状況がわかるために、絵の説明を取り去ったと推定した。この歌でも「ともし」という言葉が歌に詠まれており、同様の判断がなされたと思われる。

⑳

「天えん元ねん九月、うちのおほせにてつかうまつれる御屏風のうた」

ふゆ、たなみのあしろ

← 〈歌略〉（元輔集Ⅲ 九三）

内裏の御屏風に

元輔

月影のたなかみがはにきよければあじろにひをのよるも見えけり（拾遺抄 雑上 四二〇）

「田上川」は近江の歌枕である。これ以前には用例がない。江帥集五〇八番に天仁元年（一一〇八年）鳥羽院大嘗会屏風歌の例があるので、古くから大嘗会歌で詠まれていた可能性はあるが、通常なじみのある歌枕ではなかった。網代と取り合わされることが定着していたわけでもない。しかし、歌に「田上川」「網代」という言葉が詠み込まれており、絵の説明がなくても理解できる。ただ、二四頁で検討した「あじろ」の歌では、絵の説明を残していたので、一貫性の無い態度である。

以上のように、新しい題材ではあっても、歌から内容が推察できるように絵の説明を付けていないと考えられる場合が、四例ある。

七、拾遺抄に絵の説明がない場合その3

— 古今集にもよくある題材 —

貫之屏風歌では、古今集にもよくある題材であるため、絵の説明が省略されたと考えられるケースが、もっとも多かった（表5）。貫之歌以外でも、同様にこのケースがもっとも多い。

③

延喜十七年承香殿御屏風和歌 むめの木のもとに人る
たり
〔歌略〕(躬恒集Ⅲ 一三七)
←
延喜御ときの御屏風歌 みつね
ふるゆきにいろはまがひぬむめの花かにこそにたるものな
かりけれ(拾遺抄 春 九)

「梅花」の歌である。梅の色と見まがう雪が降り、香りによって梅の存在が知られるという内容である。そのような歌は古今集に、

梅花にゆきのふれるをよめる 小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく

(古今集 冬 二三五)

とある。絵の説明は必要ないと判断したのだろう。

⑦

〔おなし(天曆御とき) 屏風に〕
三月に人くちるはなみる所
〔歌略〕(清正集 九)
←
天曆御時御屏風に 清正
ちりぬべき花見る時はすがのねのながき春ひもみじかかり
けり(拾遺抄 春 三九)

「散る桜」の歌は、古今集中に枚挙に暇がない。貫之屏風歌でも省略されていた(表5) 波線部参照。

⑫

きさいのみやの御はらにおはしますひめみやをは、北
宮となむきこえける、そのみやのもたてまつるに、前
のみやすところにおはします内侍のかみ、たてまつり
たまふ御屏風に、郭公なくきのしたに人あるところ
〔歌略〕(公忠集Ⅱ 七)
←
きたの宮のもぎの時の屏風に 公忠
行きやらで山ぢくらしつほととぎすいまひと声のきかまほ
しさに(拾遺抄 夏 六九)

山路で郭公を聞く歌である。このような歌は古今集にも、

おとは山をこえける時に郭公のなくをききてよめる

きのものり

おとは山けさこえくれば郭公こずえはるかに今ぞなくなる(古今集 夏 一四二)

とある。また、公忠集の「郭公が鳴く木の下に人がいるところ」という説明は、付けても歌の解釈に役立つものではない。

⑬

〔内御屏風和歌〕
〔七月七日〕
〔歌略〕(躬恒集Ⅰ 一〇三)
←
延喜御時屏風歌 躬恒
ひこぼしのつままつよひのあき風に我さへあやな人ぞこひ
しき(拾遺抄 秋 九〇)

「七夕」は古今集に数多くある。貫之屏風歌でも絵の説明は省略されていた。（表5）波線部参照。）

20

「斎院の御屏風の歌」
萩の花みたるどころ
←
〔歌略〕（伊勢集Ⅱ 九八）
斎院御屏風のゑに
伊勢
うつろはんことだにをしき秋はぎに玉と見るまでおけるし
らつゆ（拾遺抄 秋 一一二）

「萩」の歌である。古今集秋上に全九首の萩歌群がある。

23

「多いくわん元ねん八月ついたちころ、一条の大納言の
いへのさうしのうた」
冬、たかさこ
←
〔歌略〕（元輔集Ⅲ 一〇六）
一条のおほいまうちぎみの家の障子に 元輔
たかさこの松にすむつる冬くれればをへのしもやおきまさ
るらむ（拾遺抄 冬 一四二）

「高砂の松」は、古今集に何首も詠まれているが、高砂と鶴との取り合わせは珍しい。普通は鹿である。だが、歌から高砂の松にとまる鶴が詠まれていることは明白であり、絵の説明は必要ない。

25

「内の御屏風四帖わか」
十二月、雪おほうつもるゑ
←
〔歌略〕（兼盛集Ⅰ 一七〇）
冷泉院御時屏風に
兼盛
人しれず春をこそまてはらふべきひとなきやどにふれるし
らゆき（拾遺抄 冬 一五五）

「雪が降りしきる宿」を詠んだ歌は、古今集に次のようにある。

「題しらず」
わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなけれ
ば（古今集 冬 三三二）
「詠人しらず」

絵の説明は必要ない。

29

「五条の内侍のかみ御四十賀を、きよつらのみふ卿のつ
かまつりたまふ屏風のゑに」
たつむれて雲にあそふところ
←
〔歌略〕（伊勢集Ⅰ 六九）
五条尚侍の賀を清貫がし侍りける屏風に 伊勢
おほぞらにむれたるたづのさしながらおもふ心のありげな
るかな（拾遺抄 賀 一八一）

「大空の鶴」を詠んだ歌は、古今集に、

寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける

大江千里

あしたづのひとりおくれでなくこそは雲のうへまできこえつが

なむ（古今集 雑下 九九八）

とある。また、これはおめでたい凶柄であり、

人の子うみて侍る七日の夜

たづの子の雲井にあそぶよはひこそ空にしらるる物には有りけれ（元輔集 五五）

というように、人への贈り物や祝いの歌として、詠まれることが多かった。歌の内容からも状況は理解でき、絵の説明は必要ない。

33

<p>「内御屏風の歌」 いねほしたり</p>	←	<p>「歌略」（躬恒集V 四〇）</p>
<p>延喜御時月令御屏風歌 躬恒</p>		
<p>かりてほす山田のいねをかぞへつつおほくのとしをつみでけるかな（拾遺抄 雑上 四一七）</p>		

「稲を干す」歌としては、古今集に、次のような屏風歌がある。

屏風の糸よみあはせてかきける 坂上これのり

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうければ（古今集 雑上 九三二） 11延喜五年（九〇五年）四月以前屏風

風

この題材は屏風歌に多くあり、他にも、次のような歌がある。

いねかりほせる

かりてほす山田のいねの袖ひちてうへしさなへとみえもする哉

（貫之集I 四八二） 81天慶四年（九四一年）三月内裏屏風

いねかりほせる

朝露のをくてのいねは稲妻をこふとぬれてやかはかさるらん

（貫之集I 五一二） 84天慶五年（九四二年）九月内裏屏風

古今集は則歌も、稲を刈り干す様子を詠んだものであろう。絵の上空には「雁」も描かれていたらしい。そこで、「かりてほす」に「雁」を掛け、下の句でその鳴く様を詠んだのである。是則歌の影響力が大きかったことは、第一句第二句を同じくする歌が多いことが示している。容易に古今集は則歌が連想される拾遺抄歌は、絵の説明が必要ないと判断されたのであろう。

35

<p>「五条の内侍のかみ御四十賀を、きよつらのみふ脚のつかまつりたまふ屏風の糸に」 わたつうみよりふねこかれていたり</p>	←	<p>「歌略」（伊勢集I 七二）</p>
<p>屏風に 伊勢</p>		
<p>はるばると雲井をさしてこぐふねのゆくすゑとほくおもゆるかな（拾遺抄 雑上 四四二）</p>		

「海の舟」の歌は、古今集によくある。たとえば次の歌である。

おきのくにながされける時に舟にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける 小野たかむらの朝臣

わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつ

り舟（古今集 羈旅 四〇七）

36

「五条の内侍のかみ御四十賀を、きよつらのみふ脚のつまつりたまふ屏風のゑに」
 わかなつむところ
 〔歌略〕（伊勢集Ⅰ 六一）

←

（五条尚侍の賀を清貫がし侍りける屏風に）（伊勢）
 はるののわかかなならでもきみがためとしのかずをもつまむとぞおもふ（拾遺抄 賀 五八五）（島根大学本巻五、一八一の次）

若菜摘みの歌は、古今集に多数ある。貫之屏風歌でも、絵の説明は省略されていた。（表5）波線部参照。

37

「右兵衛督た、きみの朝臣の月令の屏風のれう」くれの春、さくらはなちりおつるところ、ゆく人むまをと、めてみる
 〔歌略〕（能宣集Ⅰ 一三四）

←

屏風に
 能宣
 ちりそむるはなをみすててかへらめやおほつかなしといもはまつとも（拾遺抄 春 五八九）（静嘉堂文庫本巻一、五四の次）

「桜を見捨てて帰りたい」という歌は古今集に次のごとくある。うりむるんのみこのもとに、花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる
 そせい

38

「屏風のうたよめとはへりしに」十二月、ゆきふるやまさと
 〔歌略〕（能宣集Ⅲ 二二）

←

屏風に
 （能宣）
 あたらしきはるさへちかくなりぬればふりのみつもるとしのゆきかな（拾遺抄 夏 五九四）（静嘉堂文庫本朱書入校合本巻四、一六一の次）

いざけふは春の山辺にまじりなむくれなばなげの花のかげかは（古今集 春下 九五）

「歳暮の雪」の歌は、古今集に次のようにある。

年のはてによめる

在原もとかた

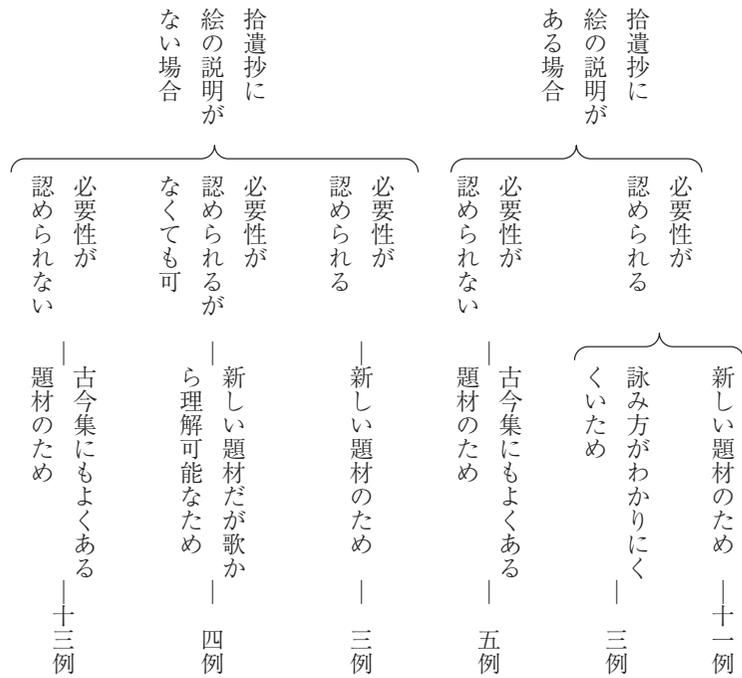
あらたまの年のをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつ
 つ（古今集 冬 三三九）

以上十三例は、古今集にもある題材であるため、絵の説明が付けられなかったと思われる。ただし、この中には、元の採歌資料にも絵の説明がなかったため、拾遺抄も付けなかったというケースもいくつか含まれているだろう。

おわりに

以上、拾遺抄に絵の説明がある場合十九例と、拾遺抄に絵の説明がない場合二十例を検討してきた。ただし、絵の説明がない場合については、全三十八例中、私家集に絵の説明が見出せる二十例に限定した。拾遺抄が絵の説明を取り去った可能性が高いからである。

さて、以上の検討結果を、最初に示した貫之屏風歌の関係図と同じ形にまとめると、次のようになる。



拾遺抄に絵の説明がない場合では、古今集にもよくある題材であるため、絵の説明を付けなかったと思われるケースが十三例あり、もつとも多い。

つまり、貫之以外の屏風歌も、貫之屏風歌と同じ傾向だったということがある。しかも、そのような拾遺抄の方針が徹底して実行されていないことも、貫之屏風歌と同じである。「八月十五夜」のように、徹底しなかった理由が推定されるケースもあるが、とくに理由もなく絵の説明を付けたり付けなかったりしている例が、まみ見られるのである。

以上、前稿と本稿で、拾遺抄が屏風歌の絵の説明をどう処理しているかという問題を追究してきたわけだが、その結果明らかになったのは、拾遺抄には歌を正確に理解するための情報を提供しようとする姿勢があることと、その方針が徹底されていないことである。

前者の情報の提供という姿勢は、拾遺抄撰者が屏風歌という存在をどのように受け止めていたかを示唆する。すなわち、拾遺抄撰者は屏風歌が絵に対して詠み合わされたものだという要素を重視し、本来詠まれたとおり絵と合わせて楽しむべきだと考えていたのではない。また後者の不徹底という状況は、拾遺抄編纂の精度という問題につながるだろう。拾遺抄は一定の方針のもとに編纂されているが、それを隅々にまで及ぼすまでには至らなかったと言えるのである。

注

1. 拙稿「拾遺抄の屏風歌―詞書の絵の説明について―」（四天王寺国際仏教大学紀要）四五号 二〇〇八年三月）

2. 本稿ではとくに断らないかぎり、私家集は『私家集大成』、それ以外は『新編国歌大観』を使用する。歌仙歌集本忠見集は、『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集九』（朝日新聞社 二〇〇二年）に拠った。

3. 片桐洋一氏編『拾遺抄―校本と研究―』（大学堂書店 一九七七年）によると、拾遺抄の作者名に異同はない。拾遺集（一二九番）では、詞書「女四のみこの家の屏風に」と変わり、作者名「躬恒」となっている。
4. 拙稿「拾遺集の配列と屏風歌―配列に広がる屏風絵―」（『中古文学』七八号 二〇〇六年二月）
5. とくに信明の屏風歌に恋歌的傾向が強いことは、藤城憲児氏「源信明歌の性格―村上天皇名所絵屏風歌をめぐって―」（『湘南文学』東海大学日本文学会二三号 一九八九年三月）に詳しい。
6. 屏風の名称と番号は、拙著『屏風歌の研究 資料篇』（和泉書院 二〇〇七年）で整理・考証した結果に拠っている。
7. 新古典文学大系『拾遺和歌集』（小町谷照彦氏校注 岩波書店 一九九〇年）五三〇番歌の脚注。
8. 西本願寺本貫之集は『西本願寺本三十六人家集 本文と五句末逆引き索引』（本位伝重美氏監修・岨博司氏編 笠間書院 昭和五十九年）に拠った。
9. 『拾遺抄―校本と研究―』（注3参照）によると、流布本と貞和本は「こしのやまち」。
10. 高橋正治氏校注・訳者『兼盛集注釈』（私家集注釈叢刊4 貴重本刊行会 一九九三年）に拠った。
11. 片桐洋一氏『『拾遺抄』の歌材と表現―大和絵屏風歌との関連において―』（『古今和歌集以後』笠間書院 二〇〇〇年）（初出『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』塙書房 一九七二年）
12. 公忠集にこの歌が、「あふみのかみにて、たちに有りけるころ、殿上の人人、たなかみのあじろにきたりけるに、さけなどすすむとて」（公忠集一四番）として載る。『清原元輔集全釈』（藤本一恵氏著 風間書房 一九八八年）は、元輔が先人の公忠の詠作を借用したと見るが、『元輔集注釈 第二版』（後藤祥子氏著 貴重本刊行会 二〇〇〇年）は、「元輔歌が公忠歌の類歌として、公忠集の）行間に細字で書き込まれ、次段階で本行化して書写された」と見る。論者も後者の見解に従い、元輔作とする。

〔表6〕拾遺抄に絵の説明がある場合

屏風名	私家集	拾遺抄
a 114 康保四年（九六七年） （安和二年（九六九年） 冷泉院御時屏風*）	〔内の御屏風四てうかわか〕 むめのはなのもとにまらうときたり わがやどのむめのたちえや見えつらむおもひのほかにきみがき ませる（M系統本兼盛集161）**	冷泉院御時の御屏風に梅の花有るいへに人のきたる ところ 兼盛 わがやどの梅のたちえや見えつらんおもひのほかに君が きませる
b 26 延喜十五年（九一五年） 春齋院恭子内親王屏風 または延喜十六年（九一六 年）齋院宣子内親王屏風 か	齋院の御屏風の歌、春山にゆく人あり ちりちらずきかまほしきを故郷の花みてかへる人もあはなん （伊勢集II 97）	齋院の屏風に春山道をゆく人のかた有る所に 伊勢 ちりちらずきかまほしきをふる里の花見てかへる人もあ らなん
c 88 天曆八年（九五四年） 村上天皇名所屏風	〔御屏風〕 なつよとのわたりにふねあり郭公なく いつかたになきてゆくらむほと、きすよとのわたりのまた夜ふ かきに（歌仙歌集本忠見集7）***	天曆御時の屏風によどの渡をすぐる人有る所に郭公 をかける 忠見 いづかたになきてゆくらん郭公よどのわたりのまだよぶ かきに
d 168 長徳四年（九九八年） 以前東宮居貞親王絵	東宮にさふらひけるおほんあふきに、くらはしやまをかけ りけるに、ほと、きすのとひわたりたるかたあるところに、 人くみな歌つかうまつりけるに さつきやみくらはしやまのほと、きすおほつかなくもなきわた るかな（実方集II 189）	東宮に侍ひける御ゑにくら橋山をかけりけるに郭公 のとびわたりたる所に人人歌つかまつるなかに 実方中将 さつきやみくらはし山の郭公おほつかなくもなき渡るか な
e 33 延喜十八年（九一八年） 二月醍醐天皇第四皇女勤 子内親王髪上屏風	延喜十二年に二宮イ 女四宮の御屏風うた ゆくみちはまたとをけれとなつ山のこのしたかせはすきふかり けり（躬恒集I 95）	月令の御屏風にたび人きのかげにやすみたる所 読人不知 行すゑはまだとほけれど夏山のこのした影は立ちうかり けり
f 167 永観元年（九八三年） （長徳四年（九九八年） 修理大夫懐平家屏風	なし	修理大夫義懐家の屏風にたなばたまつりのかたかけ る所に 恵京法師 いたづらにすぐるつきひをたなばたのぬるよのかずとお もはましかば
g 125 天元二年（九七九年） 十月円融院三尺屏風	〔天元二年十月、依宣旨たてまつらする御屏風のうた〕 〔八月十五日の夜、人の家の池にはちすおひたり、このは うかふ、月かけおちたり、おとこ女所くにあそぶ、すた 水のあをへたて、ものかたりするもあり〕 池水にてれる月なみかそふればこよひそ秋のものなかなりける （順集I 143）	屏風に八月十五夜にいけ有るいへにてあそびたるか た有る所に 源順 水のおもにてる月なみをかぞふればこよひそ秋のものな りける

n	m	l	k	j	i	h
16 延喜十三年（九一三年） 十月十四日満子四十賀屏 風―清貫より―	88 天曆八年（九五四年） 村上天皇名所屏風か	89 天曆十一年（九五七年） 四月二十二日右大臣藤原 師輔五十賀屏風―頭中将 伊尹より―	113 応和二年（九六二年） 一月七日〜康保五年 （九六八年）六月十三日 右兵衛督忠君屏風	178 長保三年（一〇〇一年） 東三条院四十賀屏風	134 寛和二年（九八六年） 清涼殿障子	163 正暦元年（九九〇年） 〜長徳元年（九九五年） 粟田山庄障子
うみにのみひたれるまつのふかみとりいくしほとかはしるへか りける（伊勢集I71）	なし	なし	ゆきふかき山ちへなにか、へるらんはるまつはなのかけにとま らて（能宣集III 219）	われひとり入にしこのしらやまにゆきふりにたる人を見るか な（輔尹集59） 東三条院の御賀屏風のゑに、このしらやまのかたかきた る、人の、ほるさきにまた人のとをくゆく 〔屏風のうたよみはへるに〕 おなしいへの仏名のあしたに、導師のかへりはつるむめの きのもとにすゑて、ものなとかつつけはへるところ	あしるぎにかけつ、あらふからにしきひをへてよするもみちな りけり（能宣集I 312） 〔うちの御歌合に〕 あしる	十月はかりに、たひゆく人の、もみちしたる木のもとに、 やとりたるを 行すゑはもみちのもとにやと、らしおしむにたひの日かすへぬ へし（惠慶集134）
516 うみにのみひたれる松のふかみどりいくしほとかはしる べかるらむ	350 五条の尚侍の賀の屏風のゑに、松のうみにひちたる かたあるところに 伊勢	179 吹く風によそのもみちはちりぬれどときはのかけはのど けかりけり 兼盛	161 雪ふかき山ちへなにかかへるらんはるまつ花のかけにと まらで 大中臣能宣	149 我ひとりこのしちをこしかども雪ふりにけるあとを こそ見れ 藤原佐忠朝臣	139 あじろぎにかけつつあらふからにしきひをへてよするも みちなりけり 読人不知	131 二条右大臣のあはたの山庄の障子のゑにたび人のも みぢ有るところにやどりたるかた有るに、惠慶法し いまよりはもみちのもとにやどとらじをしむにたびのひ かずへぬべし

o	p	q	r	s
<p>88 天曆八年（九五四年） 村上天皇名所屏風</p>	<p>165 長徳元年（九九五年） 五月以前屏風</p>	<p>88 天曆八年（九五四年） 村上天皇名所屏風</p>	<p>136 貞元三年（九七八年） （永延二年（九八八年）） 三条太政大臣藤原頼忠家 紙絵</p>	<p>174 長徳三年（九九八年） 以前忠連房絵</p>
<p>なし</p>	<p>法師舟にのりたる所 わたつみはあまのふねこそありきけのりたかへてもこきいて たるかな（道綱母集39）</p>	<p>なし</p>	<p>屏風絵に、ぬすひとた、かひたるかた書たるかた、の人と もみえぬに ぬす人の立田のやまにいりにけりおなじかざしの名にやけかれ ん（為頼集65）</p>	<p>なし</p>
<p>517 天曆御時に名ある所所のかたを屏風にかかせ給ひて 人人にうたてまつらせ給ひけるに、たかさご をのへなる松のこずえはうちなびきなみの声にぞ風もふ きける [伊勢]</p>	<p>524 屏風のゑに、法師のふねにのりて侍りける所に 中納言道綱母 わたつみはあまのふねこそ有りときけのりたがへてもこ ぎてけるかな</p>	<p>526 天曆御時、屏風のゑにながらのはしばしらのわづか にのこりたるかたある所に 清正 あしまより見ゆるながらのはしばしらむかしのあとのし るべなりけり</p>	<p>539 三条おほいまうちぎみの家にかかせはべりけるたび びとのぬす人にあへるかた侍りけるところに 藤原為頼 ぬす人のたつたのやまにいりにけりおなじかざしのなを やのこさん</p>	<p>570 忠連が房の障子のゑに法師のしにてはべるかはねを 法師のみはべりてなきたるかたをかきて侍るところ を、やまにのほりて侍りけるついでにみはべりて 相方朝臣 ちぎりあればかねなれどもあひぬるをわれをばたれか とはんとすらん</p>

* 屏風の名称と番号は、拙著『屏風歌の研究 資料篇』（和泉書院 二〇〇七年）で整理・考証した結果に拠った。
 ** M系統本兼盛集は『兼盛集注釈』（高橋正治校注・訳者 貴重本刊行会 一九九三年）に拠った。
 *** 歌仙歌集本忠見集は『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集九』（朝日新聞社 二〇〇二年）に拠った。

拾遺抄の屏風歌（承前）

〔表7〕 拾遺抄に絵の説明がない場合

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
105 応和元年（九六一年） 十二月十七日朱雀院若宮 昌子内親王裳著屏風	60 承平三年（九三三年） 八月二十七日北宮康子内 親王着裳屏風	93 天慶九年（九四六年） （天徳二年（九五八年） 七月天曆御時屏風	63 承平四年（九三四年） 三月二十六日右宮穩子 五十賀屏風―贈主不明―	20 延喜十五年（九一五年） 春齋院恭子内親王屏風	27 附・桃園齋院屏風 （九一六年）	30 延喜十七年（九一七年） 承香殿女御源和子屏風	13 延喜六年（九〇六年） 頃延喜御時月次屏風	63 承平四年（九三四年） 三月二十六日右宮穩子 五十賀屏風―贈主不明―
なし	なし	「おなし（天曆御とき）屏風に」 三月に入くちるはなみる所 ちりぬへき花みるときはすかのねのながきはる日もみしか、り けり（清正集9）	なし	延喜十五年故齋院屏風歌 かをとめてたれをらざらん梅のはなあやなしかすみ立なくし そ（躬恒集III 132）	なし	延喜十七年承香殿御屏風和歌 むめの木のものとに人あたり ふる雪にいろはまがひぬ梅の花かにこそにたるものなかりけれ （躬恒集III 137）	延喜御時、月なみの御屏風に あらたまのとしたちかへるあしたよりまたる、ものはうぐひす のこゑ（素性集I 50）	なし
我やとのかきねやはるをへたつらむなつきにけりとみゆるうのはな（順集I 43）	なし	「おなしとし（応和二年）の十一月、前朱雀院のわか宮の 御もきのひのれうに、御ひやうふつかまつらせたまふ、人 くにおほせてたてまつらせ給歌のうち」 四月、うの花さげるところ	なし	延喜十五年故齋院屏風歌 かをとめてたれをらざらん梅のはなあやなしかすみ立なくし そ（躬恒集III 132）	なし	延喜十七年承香殿御屏風和歌 むめの木のものとに人あたり ふる雪にいろはまがひぬ梅の花かにこそにたるものなかりけれ （躬恒集III 137）	延喜御時、月なみの御屏風に あらたまのとしたちかへるあしたよりまたる、ものはうぐひす のこゑ（素性集I 50）	なし
58 屏風に 我がやとのかきねや春をへだつらむ夏きにけりとみゆる 卯の花 順	44 北宮の裳ぎの時の屏風に はるふかくなりぬとおもふをさくら花ちるこの本はまだ 雪ぞふる 「読人不知」	39 天曆御時御屏風に ちりぬへき花見るときはすがのねのながき春ひもみじか かりけり 藤原清正	27 承平四年中宮賀の屏風に はるのたを人にまかせてわれはただ花に心をつくるころ かな 「忠岑」	15 齋院の屏風に かをとめてたれをらざらんむめの花あやなしかすみ立ち なくしそ 躬恒	13 しろたへのいもがころもとむめの花いろをもかをもわき ぞかねつる 「読人不知」	9 延喜御ときの御屏風歌 ふるゆきにいろはまがひぬむめの花かにこそにたるもの なかりけれ みつね 桃園にすみ侍りけるこ前齋院の家の屏風に	4 延喜御時の月令御屏風歌 あらたまのとしたちかへる朝よりまたるものはうぐひ すのこゑ 素性法師	2 承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風に 紀文元 春霞たてるを見ればあらたまのとは山よりこゆるなり けり

<p>⑩ 41 延長三年（九二五年） 頃以前延喜御時月次屏風</p>	<p>延喜御時御屏風に 神まつる卯月にさけるうのはなをしろくもきねのしらけたるか な（躬恒集 I 344） 〔ていしの院の歌合に〕 ほと、きす やまかつとひとはいへともほと、きすまつはつこゑは我のみそ きく（是則集 9）</p>	<p>59 神まつる卯月にさけるうの花はしろくもきねのしらけた るかな 延喜御時月令御屏風に 躬恒</p>
<p>⑪ 33 延喜十八年（九一八年） 二月醍醐天皇第四皇女勤 子内親王髪上屏風</p>	<p>きさいのみやの御はらにおはしますすみみやをは、北宮と なむきこえける、そのみやのもたてまつるに、前のみやす ところにおはします内侍のかみ、たてまつりたまふ御屏風 に、郭公なくきのしたに人あるところ 行やうて山路くらしつほと、きすいまこゑのきかまほしさに （公忠集 II 7） 〔屏風のうたよみはへるに〕 五月、さうふ々きたるいへのはしに、人なかめてゐたると ころ きのふまでよそにおもひしあやめ草けふわかやとのつまとみる 哉（能宣集 III 201）</p>	<p>63 山がつと人はいへどもほととぎすまづはつこゑはわれの みぞきく 女四親王の屏風 是則</p>
<p>⑫ 60 承平三年（九三三年） 八月二十七日北宮康子内 親王着裳屏風</p>	<p>九条の右大臣のいへの屏風に あやしくもしかのたちとのみえぬかなをぐらの山にわれやきぬ らん（兼盛集解題・彰考館蔵兼盛集）</p>	<p>69 きたの宮のもぎの時の屏風に 行きやうて山ぢくらしつほととぎすいまひと声のきかま ほしさに 公忠朝臣</p>
<p>⑬ 113 応和二年（九六二年） 一月七日〜康保五年 （九六八年）六月十三日 右兵衛督忠君屏風</p>	<p>〔西宮の源大納言大饗日たつるれうに、四尺屏風あたらし くてうせさしむるれうの歌〕 五月、ともしするところ ほと、きすまつにつけてやともしする人もやまへに夜をあかす らむ（順集 I 11）</p>	<p>70 屏風に 昨までよそにおもひしあやめ草けふ我がやどのつまと見 るかな 大中臣能宣</p>
<p>⑭ 90 天曆十一年（九五七年） 四月二十二日坊城右大臣 藤原師輔五十賀屏風―中 宮安子より―</p>	<p>右大臣定国の四十賀内裏より屏風を調じて給ひける 壬生忠峯 おほあさきのもりのした草しげりあひてふかくも夏に 成りにけるかな 此歌躬恒が集にあり</p>	<p>77 あやしくもしかのたちどの見えぬかなをぐらの山に我や きぬらん 兼盛</p>
<p>⑮ 112 康保四年（九六七年） 一月十一日高明大饗屏風</p>	<p>右大将四十賀の屏風に、なつ おはらきのもりのした草しげりあひてふかくもなつのなりにけ るかな（忠岑集 I 3）</p>	<p>78 郭公まつにつけてやともしする人も山辺によをあかすら ん 西宮右大臣の家の屏風に 読人不知</p>
<p>⑯ 10 延喜五年（九〇五年） 二月十日右大将定国四十 賀屏風</p>	<p>右大臣定国の四十賀内裏より屏風を調じて給ひける 壬生忠峯 おほあさきのもりのした草しげりあひてふかくも夏に 成りにけるかな 此歌躬恒が集にあり</p>	<p>86 おほあさきのもりのした草しげりあひてふかくも夏に 成りにけるかな 此歌躬恒が集にあり</p>

②4	②3	②2	②1	②0	①9	①8	①7
135 永延二年（九八八年） 三月二十五日東三条関白 兼家六十賀屏風	127 永観元年（九八三年） 八月一日頃一条大納言為 光家障子	148 正暦元年（九九〇年） 以前屏風	113 応和二年（九六二年） 一月七日〜康保五年（九六 八年）六月十三日右兵衛 督忠君屏風	26 延喜十五年（九一五年） 春齋院恭子内親王屏風ま たは延喜十六年（九一六 年）齋院宣子内親王屏風 か	114 康保四年（九六七年） 〜安和二年（九六九年） 冷泉院御時屏風	39 延長三年（九二五年） 頃以前内裏屏風	39 延長三年（九二五年） 頃以前内裏屏風
大入道殿御賀の御屏風の歌 （兼盛集Ⅰ 56） 見わたせば松の葉しろき吉野山いくよをつめる雪にかあるらん	たかさこのまつにすむつるふゆくればおのへのしもやおさまさ るらむ（元輔集Ⅲ 106） 冬、たかさこ 「あいくわん元ねん八月ついたちころ、一条の大納言のい へのさうしのうた」	なし	「九条の右大臣のいへの屏風に」 しくれゆゑかつくたもとをよそ人はもみちをはらふ袖かどやみ る（兼盛集解題・彰考館蔵兼盛集）	「齋院の御屏風の歌」 萩の花みたるどころ うつろはんことたにおしき秋萩にをれぬはかりもをける露かな （伊勢集Ⅱ 98）	「内の御屏風四帖わか」 八月十五夜 夜もすから見てをあかささん天の原こよひの月を雲なくしそ （兼盛集Ⅰ 165）	「内御屏風和歌」 八月十五夜 いつくにか今夜の月のてらさらんあかぬは人のこゝろなりけり （躬恒集Ⅰ 104）	「内御屏風和歌」 「七月七日」 たなはたのつまつよひの秋かせにわれさへあやな人そ恋しき （躬恒集Ⅰ 103）
148 入道撰政の家の屏風に 見わたせば松の葉しろきよしの山いくよつもれる雪にか 有るらむ 兼盛	142 一条のおほいまうちぎみの家の障子に たかさこの松にすむつる冬くればをのへのしもやおさま さるらむ 元輔	140 屏風のゑに ふしづけしよどのわたりをけさ見ればとけむごもなく氷 しにけり 兼盛	137 「屏風に」 しくれゆゑかつくたもとをよそ人はもみちをはらふ袖か どや見る 兼盛	122 齋院御屏風のゑに うつろはんことだにをしき秋はぎに玉と見るまでおける しらつゆ 伊勢	118 屏風に よもすがら見てをあかささん秋のつきこよひはそらに雲な かりけり 平兼盛	117 同じ「延喜」御時の御屏風に いづこにかこよひの月のみえざらむあかぬは人のこゝろ なりけり 躬恒	90 延喜御時屏風歌 ひこぼしのつままつよひのあき風に我さへあやな人ぞこ ひしき 躬恒

<p>②5 114 康保四年（安和二年冷泉院御時屏風（九六七）九六九年）</p>	<p>②6 63 承平四年（九三四年）三月二十六日 后宮穩子五十賀屏風―贈主不明―</p>	<p>②7 116 安和二年（九六九年）七月二十一日 左大臣師尹五十賀屏風</p>	<p>②8 117 安和二年（九六九年）十二月九日 小野宮太政大臣実頼七十賀屏風</p>	<p>②9 16 延喜十三年（九一三年）十月十四日 満子四十賀屏風―清貫より―</p>	<p>③0 61 承平四年（九三四年）三月二十六日 后宮穩子五十賀屏風―内裏より―</p>	<p>③1 127 永観元年（九八三年）八月一日 頃一条大納言為光家障子</p>	<p>③2 39 延長三年（九二五年）頃以前内裏屏風</p>
<p>〔内の御屏風四帖わか〕 十二月、雪おほうつもるい糸 人しれず春をこそまで我宿に降つむ雪をはらふ人なみ（兼盛集 I 170）</p>	<p>なし</p>	<p>天徳二年右大臣も、の賀の屏風歌 きみかよをなに、たとへむさ、れいしのいはほとならんほども あかぬを（元輔集 III 13）</p>	<p>をの、宮の大まうちきみの、五十かしはへりし屏風に わかやとにさけるさくらの花さかりちとせ見るともあかしとそ おもふ（兼盛集解題・彰考館蔵兼盛集）</p>	<p>〔五条の内侍のかみ御四十賀を、きよつらのみふ聊のつかまつりたまふ屏風のゑに〕 たつむれて雲にあそふところ おほそらにむれたるたつのさしなからおもふ心のありけなるかな（伊勢集 I 69）</p>	<p>きさい宮の五十の賀内にせさせ給しに屏風歌、はらへする所 みそぎつ、思ふことをそ祈つるやを萬代の神のまに―（伊勢集 II 84）</p>	<p>なし</p>	<p>〔内御屏風和歌〕 くさあはせ さくらはなわかやとにのみありと見はなきものくさはおもはさ らまし（躬恒集 I 99）</p>
<p>155 冷泉院御時屏風に 人しれず春をこそまではらふべきひとなきやどにふれる しらゆき 兼盛</p>	<p>173 承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風に 齋宮内侍 いろかへぬ松とたけとのすゑのよをいづれひさしと君のみぞ見む</p>	<p>175 小野宮大臣の五十賀し侍りける時の屏風に 元輔 きみがよをなににたとへんさざれ石のいはほとならん程もあかねば</p>	<p>176 わがやどにさけるさくらはなざかりちとせ見るともあかじとぞ思ふ 兼盛 〔小野宮大臣の五十賀し侍りける時の屏風に〕</p>	<p>181 五条尚侍の賀を清貫がし侍りける屏風に 伊勢 おほそらにむれたるたつのさしなからおもふ心のありけなるかな</p>	<p>188 寛平四年中宮の賀し侍りける時の屏風に 藤原伊衡朝臣 みそぎしておもふ事をぞいのりつるやほよろづよのかみのまにまに 故一条のおほいまうちきみのいへの障子に 能宣 たごのうらにかすみのふかくみゆるかなもしほのけぶり 立ちやそふらん</p>	<p>380</p>	<p>395 延喜御時月令御屏風に 凡河内躬恒 さくら花我がやどにのみ有りとみばなきものくさはおもはざらまし</p>

38	37	36	35	34	33
<p>151 正暦二年（九九一年） 以前内裏屏風</p>	<p>113 応和二年（九六二年） 一月七日〜康保五年（九六八年）六月十三日右兵衛督忠君屏風</p>	<p>16 延喜十三年（九一三年） 十月十四日満子四十賀屏風―清貫より―</p>	<p>16 延喜十三年（九一三年） 十月十四日満子四十賀屏風―清貫より―</p>	<p>124 天延元年（九七三年） 九月内裏名所屏風</p>	<p>39 延長三年（九二五年） 頃以前内裏屏風</p>
<p>あたらしきはるさへちかくなりゆけはふりのみまさるとしのゆきかな（能宣集Ⅲ22）</p> <p>十二月、ゆきふるやまさと</p> <p>〔屏風のうたよめとはへりしに〕</p>	<p>ちりそむるはなをみすて、かへらめやおほつかなしといもはまつとも（能宣集Ⅰ134）</p> <p>〔右兵衛督た、きみの朝臣の月令の屏風のれう〕</p> <p>くれの春、さくらははなちりおつるところ、ゆく人むまをと、めてみる</p>	<p>春野にわかな、らねと君かためとしのかすをもつまむとそおもふ（伊勢集Ⅰ62）</p> <p>〔五条の内侍のかみ御四十賀を、きよつらのみふ卿のつかまつりたまふ屏風のゑに〕</p> <p>わかなつむところ</p>	<p>はるくくと雲をさしてこぐふねのゆくさきとほき心ちこそすれ（伊勢集Ⅰ72）</p> <p>〔五条の内侍のかみ御四十賀を、きよつらのみふ卿のつかまつりたまふ屏風のゑに〕</p> <p>わたつうみよりふねこかれていたり</p>	<p>月かけのたなかみかはにきよければあじろのひをのよるもみえけり（元輔集Ⅲ93）</p> <p>〔天えん元ねん九月、うちのおほせにてつかうまつれる御屏風のうた〕</p> <p>ふゆ、たなみのあしろ</p>	<p>かりてはす山田のいねをかすへつ、おほくのとしをつみてける哉（躬恒集Ⅴ40）</p> <p>〔内御屏風の歌〕</p> <p>いねほしたり</p>
<p>594 屏風に あたらしきはるさへちかくなりぬればふりのみつもるとしのゆきかな（静嘉堂文庫本朱書入校合本卷四、一六一の次）</p> <p>（能宣）</p>	<p>589 屏風に ちりそむるはなをみすてかへらめやおほつかなしといもはまつとも（静嘉堂文庫本卷一、五四の次）</p> <p>能宣</p>	<p>585 屏風に はるののわかなならでもきみがためとしのかずをもつまむとぞおもふ（鳥根大学本卷五、一八一の次）</p> <p>（伊勢）</p>	<p>442 屏風に はるばると雲井をさしてこぐふねのゆくすゑとほくおもほゆるかな</p> <p>伊勢</p>	<p>420 内裏の御屏風に 月影のたなかみかはにきよければあじろにひをのよるも見えけり</p> <p>元輔</p>	<p>417 延喜御時月令御屏風歌 かりてはす山田のいねをかぞへつとおほくのとしをつみてけるかな</p> <p>躬恒</p>